

技術委員会報告

～ 福井しあわせ元気国体2018 ～

日時：平成30年9月30日（日）～10月4日（木）

結果

【成年】1回戦 山口県0（0-0，0-1）1徳島県

〔内容〕

序盤よりボールを支配される展開であったが、DF江口を中心にブロックを強固にして、決定的なチャンスは作らせず、時折カウンターで相手ゴールを脅かすといった展開で、考えていたゲームプラン通りに進んでいた。前半途中に相手ファールでPKを得ることができたが、それを失敗し、両チーム無得点のまま前半を終えた。



後半も同じような展開が続く中で、カウンター攻撃から得たFKやCKでゴールポストを叩いたり、バーをほんのわずかに越えるシュートを放ったりするなど、得点を挙げる以外は狙い通りの試合展開となっていた。台風接近によるレギュレーションの変更で、延長なしのPK合戦かと思われた終了直前、相手の不意を突いたミドルシュートが決まり、敗退となった。

〔今後に向けて〕

選手の選考から長期にわたった強化が実り、本国体への出場となったが、チームはコンセプトを作り上げてチームでその意図を共有し、徹底させながら一体となって試合に臨むことができた。

県内育成年代の選手がほとんどで構成されたチームは他県でも類を見ることはほぼなく、一貫した強化の形は理想的とさえ言えるものではないだろうか。今後も本県育成年代の選手の動向を注視していきながら、第1種チームの強化と連携を図ることが大切である。

また、今年はレノファ山口に協力をいただき、トレーニングマッチをさせていただくなど、オールやまぐちで選手のモチベーションアップに繋がったことも大きな成果である。今回の経験を来年度以降のチーム強化へ是非つなげていただきたい。

【少年】2回戦 山口県1（1-2，0-1）3大阪府

〔内容〕

相手はJFAプレミアリーグU18で戦うチーム（G大阪、C大阪、履正社

など)の選抜ということもあり、戦前からかなりの劣勢が予想される試合であった。開始直後より、相手選手の落ち着いたポゼッションを何とか崩して奪ったボールをできるだけシュートに結びつける、という内容となった。しかし、相手はかなり余裕をもった立ち上がりで、精神的な隙も垣間見えていた。前半10分、その隙を突いた本県は、中盤で奪ったボールを縦へのドリブルから混戦を生み出し、先制点を挙げる。先制点に目を覚ました相手は、左右への大きく、正確なサイドチェンジから次々とチャンスを作り出し、その後10分間の内に2点を取り、逆転に成功して前半を終えた。



後半はリードする相手が少し雑な攻撃に終始し、ボールを奪ってカウンターやFKからチャンスを作り出すといった試合内容であった。GKと1対1になることなどチャンスは本県の方が多く作り出すものの、フィニッシュの精度が低く、得点までに至らず、終盤相手に1点を追加され、1-3で敗戦した。

[今後に向けて]

フィジカル、技術など個人の差が見受けられるチームとの対戦であったが、最後まで諦めずに真面目に取り組むことはその差を埋めるに十分なものであった。また、大会直前にブロック大会に正選手として出場した複数選手の怪我により、戦力ダウンを余儀なくされるなかで戦ったことは残念であり、万全なチーム状態で戦ってみたい相手であった。

しかしながらおよそ日本のスタンダードと言われるチームとの真剣勝負は、よい経験となった。この経験を次につなげ、来年度の活躍を期待したい。



トピック (少年)

1 基本技術+判断

スタンドから観戦して、感じたことは、「基本の差」である。ボールをける、とめる、はこぶという基本の精度はもちろんであるが、オフの『判断』あつての基本技術が、本県選手には決定的に足りないと感じた。

勝ち上がる県の選手は、そのほとんどが状況を判断し、駆け引きをしてドリブルとパスの選択やファーストタッチのボールの置き所を決定しており、本県選手のそれとは格段の違いが見受けられた。このことは他の試合でも顕著に表れており、上位に進むにつれその質は高まっているように感じられた。

2 個による攻撃の質の向上

アタッキングサードに入り、相手ゴールを向いてボールを保持する選手のゴールに対する意識が非常に高くなっていた。そのような状況では、ほとんどの選手が相手をかかわしてシュートを狙おうとしており、ドリブルやフェイントの質が昨年の大会に比べかなり高くなっているように感じた。

3 ポジションの特徴

- (1) 多くのチームで180cm超のボランチの選手を使っていた。
- (2) 攻撃的MFに小柄ではあるが、前向きにプレイするドリブルやシュート技術に長けた選手を使っていた。
- (3) GKのサイズは年々大型化の一途をたどっている。

おわりに

本年度は久しぶりに2つのカテゴリーが本大会に出場し、それぞれ貴重な経験を積み上げたと考える。勝利に結びつかなかったのは残念であるが、成年、少年共にそのほとんどが育成年代から本県でサッカーに取り組んできた選手で構成され、真摯にサッカーに向き合うその姿は、指導者冥利に尽き、胸を熱くさせるものがあった。しかし、同時にそれぞれのカテゴリーに大きな課題も突きつけられたように感じる。

成年は地域リーグや全国社会人大会への出場など、より高いレベルでの経験をすることが必要であろう。そして、今回のように計画的に練習会などを実施して、チーム戦術やグループ戦術などのベクトル合わせをすることも大切である。少年はトレセンレベルでの更なる強化や、年間通じての強化となってくるので、所属チームとの連携も大切な要件となってくる。また、選手の体調管理にも細心の注意を払わねばなるまい。女子についても、同一地域の活躍を見ると、中国地域を勝ち抜くことイコール大会勝利に結びつくものと考えることができる。

そして最も大切なことは、我々指導者が一つのチームとなって山口県のサッカーを更に強くするという考えで取り組むことではないだろうか。

おわりに、本大会出場まで、多大なるご理解とご協力いただいた全ての山口県のサッカー関係者に感謝いたします。本当にありがとうございました。

(文責 技術委員長)

